

AET2

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part II

Monday 1 June 2015 13.30 to 16.30 pm

Paper J12

Modern Japanese texts 3

Candidates should answer **one** question from section A and **two** questions from section B.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

Shinjigen dictionary

Kojien dictionary

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

SECTION A

Translate **ONE** of the following passages taken from **unseen** texts into **English**:
[40 marks each]

(1)

私はかつて、窓に寄りつつ、たえず彼方から群がり寄せる椿事を期待する少年であつた。自分の力で世界を変えることは叶はぬながら、世界が向うから変わってくることを願はずにはゐられず、世界の変貌は少年の不安にとつて緊急の必要事であり、日々の糧であり、それなしには生きることのできぬ或るものだつた。世界の変貌といふ觀念こそ、少年の私には、眠りや三度三度の食事同様の必需品であり、この觀念を母胎にして、私は想像力を養つてゐたのである。

その後、世界は変つたやうでもあり、変らぬやうでもあつた。たとへ私の望むやうな形に變つた世界も、變つたとたんにその豊醇な魅力を喪つた。私の夢想の果てにあるものは、つねに極端な危機と破局であり、幸福を夢みたことは一度もなかつた。私にもつともふさはしい日常生活は日々の世界破滅であり、私がもつとも生きにくく感じ、非日常的に感じるものこそ平和であつた。ただ、私にはこれに対処する肉体的な備へが欠けてゐた。抵抗する術を知らぬ感受性をあらはに示し、ただ椿事を期待し、それが来たときには、戦ふよりも受容しようと思つてゐたのである。ずつとあとになつて、私はこのもつともデカダンな少年の心理生活が、もし幸ひにして力と戦ひの意志の裏付けを得るならば、それがそのまま、武士の生活の恰好な類推を成立たせることに氣づいた。それはふしぎな、めまひのするやうな発見だつた。そのとき私は、そのやうな想像力の逆用の機会を、わが手に握つてゐたのである。

死が日常であり、又、そのことが自明であるやうな生活が、私にとつて唯一の「自然な世界」であるならば、そしてその自然さが人工的な構築によつてはつひに得られず、却つて甚だ非独創的な義務の觀念によつて容易に得られるならば、次第に私がこのやうな誘惑に牽かれ、自分の想像力を義務に変へようと企てるほど、自然な成行はなかつたにちがひない。死と危機と世界崩壊に対する日常的な想像力が、義務に転化する瞬間ほど、まばゆい瞬間はどこにもあるまい。そのためには、しかし、肉体と力と戦ひの意志と戦ひの技術が養はれねばならず、その養成を、むかし想像力を養つたのと同じ手口でやればよかつた。それといふのも、想像力も剣も、死への親近が養ふ技術である点では同じだつたからである。しかも、この二つのものは、共に鋭くなればなるほど、自分を滅ぼす方向へ向ふやうな技術なのであつた。

MISHIMA YUKIO, 'Taiyō to tetsu', *Keiteiban Mishima Yukio zenshū* (2003), pp. 544–46.

This page is blank

(TURN OVER)

Page 3 of 11

(2)

占領下日本の「外交」とは

占領下日本に
外交は存在したか

さて、そもそも占領下の日本に外交は存在したであろうか。

外交とは主権国家の対外的な政策と交渉である。日本は敗戦によって主権を奪われ、占領軍の統治下に置かれた。それゆえ、形式論理的には、独立回復まで外交は存在しなかったとも言いうる。日本の在外外交機関はすべて閉鎖され、世界各国との外交チャンネルは遮断された。日本政府は占領開始とともに諸

外国との連絡を禁じられ、ただ GHQ にのみ従属した。

他面、主権を手にした連合国最高司令官は、日本政府を通じての間接統治を行うこととなった。日本政府は最高権力者の指令（SCAPIN）を国内法令化して実施するために存続を許されたが、ともあれ存在し続けたのであり、日本側を代表する当事者であり続けた。独立国相互間の対等な関係ではなく、支配と被支配の垂直的關係においてではあったが、日本政府はマッカーサーの総司令部との間で、占領開始当初から緊密な交渉を繰り返した。そして占領の末期へ向かうとともに、予定される独立国を代表する政府として、講和交渉の一方の当事者となることに成功した。占領下の日本政府にも対外政策と交渉が存在したのである。

Question 2 continued...

もし、東京に内化された国際関係たる GHQ との交渉を日本の外交に含めるとすれば、GHQ が日本内政についてほぼ無制限の介入権限を持つだけに、それとの折衝はかつてなく濃密なものであった。しかも、それは重大な意味をもつ交渉であった。なぜなら、それこそが戦後日本の国家と社会の基本形態を長期にわたって規定することになるからである。

占領下外交の 4 局面

占領下の日本外交は、次の四つの局面に区分することができよう。

第 1 は、「天皇と日本政府を通しての間接統治」という基本形態を確定する局面である。

この時期の日本外交の至上命題は、占領軍による直接統治に移行させないことにあった。日本政府が占領政策に協力的にして有用であることをマッカーサーに理解させて、日本政府の存続を確かなものとする、そして、天皇制の廃止と昭和天皇の退位を回避することに全力が注がれた。1945（昭和 20）年 8 月 15 日に降伏した後、

占領軍の進駐を平穏に受け入れ、降伏文書に調印し（9 月 2 日）、直接軍政への移行を意味した「三布告」を撤回させ、幣原内閣が象徴天皇制と戦争放棄を特徴とする民主憲法の制定につきマッカーサーと合意した 46 年 2 月までの時期である。

IOKIBE MAKOTO (ed.), *Sengo Nihon Gaikōshi* (2006), 29-31.

(TURN OVER)

SECTION B

Translate **TWO** of the following passages taken from **seen** texts into **English**:
[30 marks each]

(3)

最後に僕の工夫したのは家族たちに気づかれないように巧みに自殺することである。これは数箇月準備したのち、とにかくある自信に到達した。(それらの細部に互ることは僕に好意を持っている人々のために書くわけにはゆかない。もっともここに書いたにしろ、法律上の自殺幇助罪《このくらいこっけいな罪名はない。もしこの法律を適用すれば、どのくらい犯罪人の数を殖やすことであろう。薬局や銃砲店や剃刀屋はたいてい「知らない」と言ったにもせよ、我々人間の言葉や表情に我々の意志の現われる限り、多少の嫌疑を受けなければならぬ。のみならず社会や法律はそれら自身自殺幇助罪を構成している。最後にこの犯罪人たちはたいていはいかにもの優しい心臓を持っていることであろう。》を構成しないことは確かである)僕はひややかにこの準備を終わり、今はただ死と遊んでいる。この先の僕の心もちはたいていマインレンデルの言葉に近いであろう。

我々人間は人間獣であるために動物的に死を怖れている。いわゆる生活力というものは実は動物力の異名に過ぎない。僕もまた人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いたところを見ると、しだいに動物力を失っているであろう。僕の今住んでいるのは氷のように透み渡った、病的な神經の世界である。僕はゆうべある売笑婦といっしょに彼女の賃金(一!)の話をし、しみじみ「生きるために生きている」我々人間の哀れさを感じた。もしみずから甘んじて永久の眠りにはいることができれば、我々自身のために幸福でないまでも平和であるには違いない。しかし僕のいつ敢然と自殺できるかは疑問である。ただ自然はこういう僕にはいつもよりもいっそう美しい。君は自然の美しいのを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑うであろう。けれども自然の美しいのは僕の末期の目に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、かつまた理解した、それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には満足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずにおいてくれたまえ。僕はあるいは病死のように自殺しないとも限らないのである。

附記。僕はエンペドクレスの伝を読み、みずから神としたい欲望のいかに古いものかを感じた。僕の手記は意識している限り、みずから神としないものである。いや、みずから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエンペドクレス」を論じ合った二十年前を覚えていであろう。僕はあの時代にはみずから神にしたい一人だった。(昭和二年七月)

AKUTAGAWA RYŪNOSUKE, 'Aru kyūyū e okuru shuki', in *Aru aho no isshō, shuju no kotoba, ta jūroku hen* (1969), pp.192–93.

(4)

戦後日本の三つの政治外交路線

以上のような歴史的背景から、戦後日本の対外姿勢について二つのことがいえるだろう。一方で戦後日本の対外政策もまた、古代の中国文明と近代の西洋文明に対するものと同じ型をふんだ。すなわち、外部文明を代表する米国の力の秘密たる産業・技術・学術・民主的制度を学ぶことによって、戦後日本は長期的な自立を求めた。他方で、戦後日本は1930年代以降の過度に戦争に没入した時代を

悔い、逆の方途に傾いた。実際、戦前日本の国際環境に対する一方の能動主義、軍事手段への極端な傾斜、国家による戦争への国民動員が悲惨な帰結を招いたことは、重い教訓として作用した。戦後史は逆方向の平和主義、反国家主義、国際環境への受動的協調へと傾斜するに至った。

空襲により廃墟となった主要都市に急ごしらえのバラックが建ち並ぶなかで、戦後日本の国家像や政治路線についてのさまざまな提案がなされた。その中で、戦後日本をリードする主要な軸となったのは、①社会民主主義の路線、②経済中心主義の路線、③伝統的國家観の路線、の三者である。戦後外交と表裏をなす政治路線を^{いち}一瞥^{べつ}しておきたい。

(TURN OVER)

⑨ 社会民主主義路線

大正から昭和にかけて自由主義勢力の後に
つくように発展し、戦争中には抑圧された
社会主義的諸勢力が、戦後に復活・拡大して「革新陣営」と呼ばれ
るようになった。この陣営は、「平和」と「民主主義」を戦後日本
の国家目標として掲げた。陣営の内部は一様でなく、革命を想う共
産党、マルクス主義を容認する社会党左派、社会民主主義を奉ずる
穏健な改革派である社会党右派などから成っていた。1947年4月
の総選挙で社会党が大躍進をとげて第一党になった時、革新と保守
にまたがる三党連立内閣の中心となったのは、片山哲、西尾末広ら
社会党の右派であった。GHQの民政局も、この政権を積極的に支
援した。

冷戦が始まり、米国の占領政策が改革の季節を終えて保守化する
とともに、革新勢力は反米、反体制の立場を強めた。彼らは、戦後
日本が憲法9条を捨てて再軍備すること、および親米一辺倒に傾く
ことに、国会だけでなく街頭においても鋭く反対し続けた。その中

心である社会党は、外交安全保障政策について「非武装中立」を唱
え、日米安全保障条約と自衛隊の双方に反対した。「平和」と「民
主主義」の先に「社会主義」の未来を展望して、保守政治に対抗し
たのがこのグループであり、とりわけ1960年まで日本政治に大き
な影響力を保った。

⑥ 経済中心主義路線

吉田茂に率いられたこの路線は、戦前の軍事偏重の国家を斥け、産業と貿易によって生計を立てる経済国家、通商国家として戦後日本を再建することを最重視した。その観点から吉田は、早期の本格的な再軍備に消極的であり、冷戦下の安全保障については、日米安保条約を結んで米国に依存した。国際政治的には戦後日本を西側陣営に位置する親米国家とし、国内的には自由民主主義の政治社会体制をとり、経済復興と繁栄を最優先する経済国家として戦後日本を方向づけた。「安全」と「繁栄」の達成が、このグループの国家目標であった。

IOKIBE MAKOTO (ed). *Sengo Nihon gaikōshi* (2006), pp. 282-84.

(TURN OVER)

(5)

祖母の葬式は私が小学校に入学した年であった。祖父と二人で虚弱な私を育てていた祖母は孫を学校に入れたという軽い気の弛みで死んだのだ。葬式の日には豪雨で私は家の出入りの男に負われて墓へ行った。白衣を着た十一二の姉が矢張り男に負われて私の前に赤土の山道を登って行った。

祖母の死によって初めて私は自分の家の仏壇に対して生きた感情を持つようになった。閉め切った仏壇の襖を祖父の見ていない時を選んで外から極細目に開けては閉めまた開けては倦むことを知らずに灯明の明るい仏壇を偷視^{ひそみ}して時を過した。しかし襖を開き切って仏壇に近づくことは嫌がったのを覚えていた。平地からは日光が退いて山や峠の頂だけを染めている静かな明るい西日の色を仰ぐと、何故か私はいつも八歳の時の仏壇の灯明の色を連想する。仏壇の白い襖に尋常一年らしい片仮名で祖母の長ったらしい戒名を落書したのが、家を売る頃までそのまま残っていた。

男の背の姉の姿は唯白い喪服だけしか後年思い浮べられなかった。その白衣に頭と手足をつけようと冥目して努めると赤土道と雨が次第にはっきりして来るだけで、思い通りにならないので焦立たしくなる。負うていた男の後姿も浮んで来ない。そしてこの宙に浮んだふわりと白いもの、これが姉に関する私の記憶の総てである。

姉は私が四五歳の頃から親戚の家に育てられそこで私が十一二の年に死んだ。私は父母の味と同じく姉の味を知らない。祖父は姉の死を悲しめ、悲しめと私に強要した。私は自分の心の中を捜してみたが、どの感情を何物に託して悲しみを感じたらいいかに迷った。唯老弱な祖父の哀傷極まった姿が私の心を刺し貫いた。私の感情は祖父に走り寄りそこに止まったままで祖父を越えて更に姉の方へ行こうとはしなかった。祖父は易学に通じ占断の術に長じていた。目を患って晩年は盲目に近かった。姉危篤と聞き静かに笹竹を数えて孫の命を占った。視力の衰えた老人を手伝って算木を並べてやりながら、だんだん暗くなる老顔を私はじっと見ていた。それから二三日後姉の死の報せを祖父に告げるに忍びないで手紙を二三時間隠してしてから決心して読んで聞かせた。普通の漢字はその頃私に読めた。草書で分らない字は祖父の手をとってその掌に私の指で幾度も書いてみて読む習わしだった。その手紙を読む時に握った祖父の手から受けた感触を思うと、今でも私の左の掌は冷え冷えとする。

KAWABATA YASUNARI, 'Sōshiki no meijin', in *Sakka no jiden* vol. 5: Kawabata Yasunari (1994), pp. 48–49.

This page is blank

END OF PAPER